

巻頭言

「これからの取り組み」

執行役員 技術本部長

三島 康造

昨今，ESG 投資や SDGs が重要視されている。

ESG 投資とは，環境（Environment）・社会（Social）・企業統治（Governance）に配慮している企業を重視・選別して行なう投資のことで，ESG 評価の高い企業は事業の社会的意義，成長の持続性など優れた企業特性を持つと言える。

SDGs は，Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）で，2015 年 9 月の国連サミットで全会一致で採択された。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため，2030 年を年限とする 17 の 国際目標（その下に 169 のターゲット，232 の指標が決められている）である。

今や企業の多くが SDGs を経営の中に取り込むことで ESG 投資を呼び込もうと力を注いでおり，SDGs と経営を結びつけることで企業価値を高める取り組みを行っている。当社も SDGs を意識して企業活動を行っていかなければならないが，SDGs を積極的に取り入れた材料や構造，施工方法などを客先（特に民間）に提案できれば，客先も ESG 投資を呼び込む契機となりうる。その結果，当社の受注機会を高めることもできよう。当社における企画設計，施工技術の提案，技術開発などにはこのような視点も考慮に入れ，積極的に SDGs をアピールするべきであろう。

ところで，建設業界を取り巻く環境は近年急速に変化している。少子高齢化による生産年齢人口の減少や働き方改革にともなう生産性向上の要請が喫緊の課題となっている。そ

のために、ICT（情報通信技術）を活用した i-Construction, i-Bridge 推進の一環として、計画・設計から施工・維持管理まで一連の情報を共有し建設生産システムの効率化・高度化を目的とする 3 次元データを基軸とする BIM/CIM の活用, IoT（物のインターネット）・AI（人工知能）を活用した工場など製造設備のオートメーション化や現場施工の合理化の推進, 日常業務の効率化のための ICT 活用など, 産業構造の大変革に直面している。また, 土木部門では新設から更新, 維持補修へと事業の推移にともない, 新設とは異なる新たな生産性向上の取り組みが急務となっている。

しかし, i-Construction は土工や舗装, トンネルなどでは活用されてきているが, 構造物の施工では採用が遅れている。橋梁, 建築の部材は構造が複雑で一品ずつ形状寸法や構造が異なることが珍しくない。しかし, 本来このような分野にこそ ICT を活用して生産性を向上させるべきであり, ICT 活用にあたっての難度は高いが本来は得意なはずかもしれない。当社が得意とする構造物を建設する工事においてこの流れが進めば, 工場や建設現場での働き方が抜本的に変わる可能性を秘めている。この変化についていけるかどうか, 当社グループが 10 年後に生き残っているか, さらに加速度的に発展しているかの瀬戸際である。

これらの技術開発には要素技術の開発と, システム開発がある。我々独自の要素技術の開発や他社が開発した有用な要素技術の選択と採用は当然重要であり, 継続していかなければならない。また, これらの要素技術を組み合わせたシステムを整備することにより, 要素技術の効果を最大限に発揮させることが出来る。

時代の変革はあまりにも早く, これらの取り組みは数年のうちに現実になっていると予想する。今までの我々自身の認識を変え, 建設産業の構造変化に適応できるように体制を見直すとともに, 必要とされるスキルを向上させ, ピーエス三菱グループが時代の先端にいるように努力していかなければならない。

2019 年 8 月